

無信不立（信無くば立たず）

「朋（とも）あり 遠方より来る また楽しからずや」

紀元前4世紀から5世紀、中国の春秋時代に活躍した有名な思想家、孔子の有名なことばです。そんな孔子の言動をまとめたのが論語ですが、西洋で最も読まれているのが「聖書」だとすれば、東洋で最も読まれている本が「論語」だそうです。

その論語に、孔子の食生活を語る次のような話が出てくるそうです。

「食は精を厭めず、膾は細を厭めず」

（飯は精米したのものを好んだ。なますは細かく刻んだものを好んだ。）

「食の饅して餲し、魚の餒したるや肉の敗れたるは食らわず」

（飯のすえて味が変わったものや、魚のにおいが変わって肉のくさったものは食べない。）

「色の悪しきは食らわず。臭いの悪しきは食らわず」

（色の悪いもの、においの悪いものも食べない。）

「飪を失いたるは食らわず。時ならざるは食らわず」

（煮加減の悪いもの、季節はずれのものは食べない。）

「割くこと正しからざれば、食らわず。其の醬を得ざれば食らわず」

（切り目の悪いものは食べない。料理にあったつけ汁（醬）でなければ食べない。）

「肉、多しと雖も、食気に勝た使めず。唯酒は量無けれども、乱に及ばず」

（肉は、多く食べても飯の分量以上には食べない。ただ、酒は量は決めないが、乱れるまでは飲まない。）

孔子様も、結構、食事にはうるさく、身体に気をつけながら食事をされていたようですね。ところで、弟子の子貢との有名な対話があります。

子貢が、孔子に政治の要点についてたずねた。

孔子 「食料を十分にし、軍備を十分にし、人民に信義を守らせるようにすること、これが政治の要点である」。

子貢 「どうしてもやむを得ない事情によって、（どれかを）捨て去るとしたら、どれを先にすべきでしょうか」

孔子 「軍備を捨て去ろう」

子貢 「どうしてもやむを得ない事情によって、（どちらかを）とるとしたら、残った二つのうちで、どれを先にすべきでしょうか」

孔子 「食料を捨て去ろう。（食料がなければ、人は死ぬことになるが、たとえ食料があったとしても）昔から死はすべての人間のまぬがれないところである。（しかるに）もし人民に信義の心がなかったら一日も人間として社会生活を送ってゆくことはできないのである」
（『論語』旺文社より）

小泉首相も座右の銘とされている「信無くば立たず」は、ここから来ているのだそうです。こうした孔子によって体系化された教えは、個人の礼や道徳、社会の秩序を支える理念に関する教え、「儒教」として、孟子などによって広められ、日本にも伝えられました。「衣食足って礼節を知る」ということわざがありますが、日本は、経済的には豊かになったものの、「着るものも、食べものも良くなって、礼節を知る」どころか、「お金で買えないものはない」というような風潮が懸念されています。そんな今日、「無信不立」（信無くば立たず）はより一層深い意味を持っているように感じます。政治家として心に刻まねばなりません。